

人権保育専門講座2（三重県委託事業）

自分を大事にすることは なかまを大切にすること ～たくさんの出会いは私にとって宝物！！～

西原 美保子さん(常磐会短期大学)

人権保育専門講座2では、常磐会短期大学の西原美保子さんに、「自分を大事にすることはなかまを大切にすること～たくさんの出会いは私にとって宝物！！～」と題して、桑名、津、志摩、伊賀の4会場でご講演いただき、85名の方にご参加いただきました。

西原さんは、これまで勤めてこられた保育現場で、子どもや保護者の思いや願いにふれ、また様々な出会いをとおしてご自身の保育観が変わってきたと語られました。



～今、広めているあそび～



『だんご だんご くっついた』

歌のリズムにのせて、手をグーにした「おだんご」が、体のあちこちにくっつきます。なかなかとれないおだんごを「ポコン！ポコン！」とはずして「よ～かった♪」。声をかけたい子、気になる子に「とれへん！とって～！」と声をかけてとってもらおうと、「ありがとう。すごいなあ」とふれあえます。子どもたちの「いい顔」に出あえること間違いなしです。

『変身あそび』

みんなに数秒間全身の様子を覚えてもらった後、少しだけ変身。さっきの私とどこが変わっているか、わかりますか？あててみてください。変身する人が主人公。子どもたちは自分に注目されることでうれしいと感じます。ほんの少しの違いに気づくことで、そのことをきっかけに会話ができるようになります。

私たちは普段、どのような言葉がけをしているでしょうか。“あなたのことを知りたい”という気持ちを含んだ言葉がけは、子どもにも保護者にも地域の人々に対しても、関係づくりのきっかけになるのです。



～得意なこと、苦手なこと～

私はなわ跳びが得意。長なわを回すのが得意。相手は木（木に結ぶ）。「子どもたちをうまく跳ばせるわたしの周りには、子どもたちがたくさん集まってくる」という優越感。「自分中心の保育」をしてしまっていることが、私の課題でした。そういう自分が、「自分のための保育じゃない、子どもたちのための保育なんだ」と気づかせてもらうなかで、「できない」「失敗する」ということは、決してはずかしいことじゃない、ということをも自分の中で意識し、大切にできるようになっていきました。

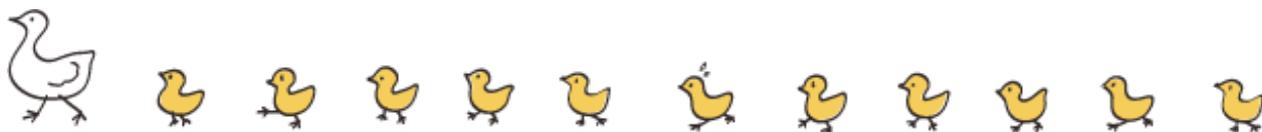
～たくちゃん（仮名）のこと～

おしっこをもらしてしまうことがよくある、たくちゃん（仮名）という子がいました。たくちゃんに対して、冷やかしゃ「くさい」「手をつなぎたくない」という周りの子どもたちの様子が見えてきます。私はそうしたとき、機会をみつけて、意識的に「西原先生、おしっこちびってしても、気持ち悪いわ」と言うようにします。

子どもたちは、先生が大好きだから、すごく心配してくれます。保育士が本当に困ったように、気持ち悪いということを伝えれば、冷やかす子はいません。「先生、私のパンツかしたるわ」「私の使って」と言ってくれ、冷やかす子はいません。

また、生活の何気ない場面で、「みんなは、おしっこちびったことない？」「ちびったとき、どんな気持ちやった？」と、おしっこで失敗したときのことを思い出させるような言葉かけをします。そうすることで、「たくちゃんだけじゃない」「自分もちびること、ある」と、子どもたちはたくちゃんの失敗を、自分と重ねてみようとしていくのです。

また、失敗してしまった下着は洗えば気持ちよくなる、というところから、クラスのみんなで洗濯あそびにつなげてきました。



保育者自身の立ち位置や視点をふり返る

私は40年間の保育現場で、障がい児保育、同和保育、人権保育をとおして、「子どもの人権尊重」の視点や「子どもは権利の主体である」という視点を学んできました。しかし、ふり返ってみると、「子どもの人権尊重」と口では言いながら、子どもや保護者の目線に立っているつもりで、立つことができない自分がいました。そんな私がたくさんのお会いをさせていただきました。人と出会うなかで、考え方やものの見方に気づき、自分自身が変わってきました。

私を大きく変えてもらったのは、同和地区を含む保育所に転勤したことでした。そこに転勤する前にもいろんなことを学ばせてもらいましたが、私はその保育所で差別の現実を目の当たりにし、自分自身を見つめ、ふり返ることになりました。その保育所で出会った二人の子どもたちとその保護者とのかかわりによる私の変容をお話しさせていただきます。

～ひろみ（仮名）のお父さんとの出会い～

ひろみの父親は、被差別部落に生まれて、結婚のときには、相手の親から反対されるという差別を受けていました。相手の家族についても、結婚したことが原因で、きょうだいが離婚したり、親戚との関係が壊れたりしたそうです。その父親からは、私に「おれの命がこの世にあるのがアカンのかなあ」と言われたことがありました。そして、何回も死のうと思ったということも話してくれました。

子どもが生まれたときのことも話してくれました。看護師さんが「お父さん、抱いてあげて」と赤ちゃん（ひろみ）を連れてきてくれたとき、「この子、ほんまに生んでよかったんかなあ、俺と同じように差別されへんかなあ、結婚差別に遭わへんかなあと、いろいろ考えてしまっ、そう考えたら、2～3秒やったかもしれやんけど、恐くて抱けなかったんや」と言われました。私は、ひろみちゃんが誕生したときの父親の思いを聞かせてもらい、わが子が生まれたときの自分や自分の周りの人たちの喜びと重ねて、「なんで、同じ命でありながらこんなふうに住まなければならないのか」と、本当に差別を憎み、なくしたいと思うようになりました。「自分は差別してない」「差別はおかしい」とは思っていたけれど、この父親から「差別の現実」を聞かせてもらうなかで、差別に対する怒りを実感としてもつことができた場面でした。

～しんや（仮名）のお父さんとの出会い～

しんやの両親は在日韓国人の方でした。結婚差別を受け、父は自分の気持ちを閉じこめて生活していました。父親はしんやちゃんのことを叩いたり、外へ出したりして、厳しい子育てをしていました。保育所では、しんやちゃんに理由はあるのですが、周りの子どもたちに手を出してしまうことが多くありました。周りの保護者からは「またしんやちゃんが泣かせた」という声をよく聞きました。保育所にお迎えに来たしんやちゃんの母親は、子どもの姿がまだ見えない所から泣き声が聞こえると、確かめずに「また、うちのしんやが誰かを泣かしたんや！」と下を向いて迎えにくる姿があったのです。子どもどうしのトラブルでしんやちゃんの父親と話をする、いつも父親は「しんやが周りの子に手を出すようなことあったら、先生、絶対止めてな」「韓国人はちゃんとしとかなあかんねん。正しくしてないと日本人から差別されるんやから」と言われていました。

そんな保護者との出会いが、それまでの私の保育観を大きく変えてくれました。言葉だけではなく、自分の命や友だちの命を大事だと子どもたちが思えるような保育、周りの家族や近くの人たちが今ここにある「この子の命」を大事だと思える保育をしていきたいと思うようになりました。



絵本の読み聞かせの取組

これまでの自分をふり返ったり見つめ直したりしていくなかで出合った、特に印象深い1冊の絵本があります。「ぼくはおおかみだ」という絵本です。(この本はすでに廃版になっています。)

参加者の中からお一人の方にこの絵本の読み聞かせを行っていただきました。

読み聞かせの後、グループで、感想や意見などを出し合ってもらいました。



ぼくは おおかみだ

クロード・ブージョン 作 末松氷海子 訳



あるところに自分がおおかみだということを知らない子どものおおかみがいました。

おおかみは、はえやちょうちょうがとびまわるのを見ているのがとても好きでした。

畑や森にすむ動物たちとも、とてもなかよしでした。

けれども……。

子どものおおかみがだんだん大きくなってくると、なかまの動物たちは、へんな目つきでおおかみを見るようになりました。

日がくると、沼のほとりは、なんだかしんぱいそうなようすになります。

おおかみといちばんなかよしだったひつじまでが、とうとうこまった顔でいました。

「だめなんだ。ぼくたち、もういっしょにあそべないよ」

ある晩、おおかみが沼のそばへやってくると、いつものなかまたちがおお声をあげて、にげだしました。

「もうこの沼で水をのむのはやめよう。ぼくたちだけのべつの場所をさがそうよ」

おおかみは水にうつった自分の顔をじっと見ました。

「ほんとうにぼくは、うさぎにもひつじにも、りすにもにてないや。ぼくの顔はなんにもしなくても、みんなをこわがらせる。だから、みんな、ぼくからにげていっちゃうんだな。ようし。それなら、これからはわざとみんなをこわがらせてやるぞ」

そこでおおかみはきばをむきだして、おそろしいうなり声をあげました。

子ウサギたちはおびえました。

(以下、省略)

この本の読み聞かせをしている間、しんやちゃんは全然聞こうとせず、後ろの方であちこちしていました。私はこの絵本から伝えたいこと、感じたことをなにも言わずにいと、(以前の私なら、自分の思いを押しつけたり、私の感じることを発言する子に対して「そうだね」と評価していたのです。) 子どものなかから「このおおかみ、しんやちゃんといっしょやなあ」「しんやみたいや」「おおかみおこらせたの周りのどうぶつやん!」とつぶやきが出てきました。また、「自分たちも、しんやのこと、こわいって決めつけてるよな」とか、「おかしいよな。うさぎだって、みんな顔違うのに、おおかみだけ違うとか、おおかみだけ大きくなって怖いとか、おかしいよな」ということを言います。子どもたちが素直にもつ感性に感動すら覚え、私はどれも否定しませんでした。

そうしたつぶやきを出発点にして、「このお話の続きをみんなで作ってみよう」と提案したら、子どもたちはいろんな意見を出し合って、「みんなでいっぱい遊ぼうぜ」という劇をつくっていききました。また、何度も繰り返して読んでいったなかでの子どもの様子やつぶやきを、保護者の方にも伝えていくことを大事にしながら子どものことを考えていく機会にしていきました。

「公平」を考えるワーク

(4~5人 1グループで)

人数で割り切れないお菓子を、公平に分ける方法を考え合いました。分け終わった後、どんなふうに分けたかを各グループから発表してもらいました。



最後に

「気になる子」のとらえ方について

「気になる子」という言葉は、保育や教育のなかでよく使う言葉です。私自身、「気になる子」のとらえ方が間違っていることに気づきました。私は子どもたちに面白いと思ってもらいたいとか子どもたちから好かれたいなど、自分が中心になった保育をしていました。自分の言うことを聞いてくれない子や、手を出したり、泣いていたり、私にとって保育をしにくい子を気にしていました。そして、「なんでこの子、私の言うこと聞いてくれへんのやろ」、「どうして私のすることに笑ってくれへんのやろ」等、私にとって保育をしにくい子を「気になる子」としてとらえていました。

しかし、本当に気にしないといけないのは、たとえば仲間から決めつけられ、関係が閉ざされている子、孤立し自信をなくしている子等、人権が大事にされていない子が人権保育における「気になる子」なのではないかと思います。同じ「気になる子」という言葉でも、気にしていく視点が違うのです。保育をしていくときに、先生方が何を中心に据え、どんな活動によって子どもにどんな力をつけていきたいかを皆さんと共に考え合いたいと思います。



参加者アンケートより



- 「自分の思いの強さで保育をしていたときは・・・」という先生の言葉が胸にささりました。思いが強すぎる・・・と感じる場面が、自分の保育をふり返っているとたくさんあります。本当の子どもの姿はどうだったのか、本当に子どものことを考えられていたのか、自分だけで満足していなかったか、とふり返るきっかけになりました。今、園で子どもと保護者も決めつける・思い込む姿が広まっている現状があります。これで、自分が「困った」と思うのではなく、これも「出会い」と思い、自身の心とも向き合っていきたいです。
- 「気になる子」を、今まではマイナスイメージでとらえていたなと思います。でも、本当はその子も困っていることがあるからこそ、わざとそんな態度をとったりもしていたのかなと思います。もっと内面やいろんな角度から見なければいけないなと反省しています。我が園では、0～3歳までなので、うまく言えない、表現できない子もいますが、よく見なくては、表情や声でくみ取っていかなくてはと思いました。
- 手遊び、変身クイズなど、明日の保育に活かしていきたいと思いました。言葉がけひとつでも、心の伝わり方は様々で、私自身「よく見てね！」という言葉がけが多かったことにはっとしました。
- 先生自身の子どもや保護者とのかかわりや教師像などを語っていただき、自分の保育と照らし合わせながら聞かせてもらいました。ちょっとした子どもの変化を見逃さず、立ち止まって考えることが大切だと思いました。明日からの子どもたちのかかわり方を意識しながら、生活していきたいと思います。
- 「私にとって保育しにくい子を気になる子としてとらえていた」という言葉を聞いて、はっと、自分もそうかと思わせてもらいました。先生のお話を聞いて、“人権”とか“一人ひとりの…”と言って保育・教育しているけれど、自分の保育って全然ダメだなあと反省しました。ありのままの姿をまるごと受けとめることってすごく簡単なようで難しいけれど、子どものためにいられる子どものことを一番に考えて、もう一度保育をふり返っていきたいと思いました。
- 差別は絶対だめ、なくしていきたい！強い思いはもっていますが、日々の保育の中で決めつけた見方をしていないか、固定概念はないか…そこから知らず知らずのうちに差別をしていないか、とても考えさせられました。どの内容も“気づき”があり、日々の中でも丁寧にかかわり、気づこうとする心が大切であると改めて感じました。子どもの本当の心の声に耳を傾けていくこと、保育の中で意識していきたいです。
- “公平”も一人ひとり考え方が違います。しかし、話し合っって進めていくことで、皆で共通した“公平”が生まれた。人と“思いやり”にふれることができました。一人ひとりの考えを大切にしていきたいと感じました。

